
恋愛traveling

有明憂那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛traveling

【NZコード】

N4944B

【作者名】

有明憂那

【あらすじ】

高校1年の主人公、真琴が病氣の母と共に都会へ上京。学校の入学式でとんでもない騒ぎが起きる…

第1話『入学』

私は生まれてから今まで“本物の恋”といつものをした事がない。

母は、『それはそれは、胸が焦がれるような、熱くて、時には辛くて、それでも幸せなもの』と言っていたが、胸が焦がれるような、熱くて辛くて幸せなものとは、いつたいどのようなものなのだろう?

もちろん、私も恋愛経験が全くないわけではない。一応これでも一通りは経験して来た。

でも、母が言つてたような、胸が焦がれるような想いも、熱い気持ちも、辛い事も、幸せな事も経験した事がない。

今年から入学する私は、夢と希望と本物の恋愛を胸に掲げ、口々、洋西白浜学院の門を潜つていた。この学校の入学式は、春休みの間に、入学生と教師と生徒の代表達だけで行われる。

これは、進学率を上げる為に、手間隙の掛かる入学式は関係者だけで行おうと言つたのが始まりだそうだ。

受付で渡されたパンフレットを見て、自分の名前を探した。
「えーっと、楠木 真琴つと……あつた! 1-B、12番か。さすがに知ってる人はいないな」

そう。口々は、都会のド真ん中の学校。

田舎から來た私に知り合いがいるはずもなく、周りは見事に見えのない名前ばかりだった。

少し人見知り気のある私は行き先が曇り空だ。

会場に入ると、まさに都会のド真ん中の学校の雰囲気が醸し出されている。

私は、案内のプラカードに従い自分の位置についた。

それから間もなくして、入学式が始まつた。

「それではこれより、洋西白浜学院の入学式を開始致します。全員

起立！礼！」

私は少し面倒臭いなと思いつつも、校長の話や、来賓の話を聞いていた。

そして、ある項目に差し掛かつたところで、周りの生徒たちがざわめき始めた。

「では次に、生徒の代表として、生徒会長の今野祐貴くんのお話です」私は少し面倒臭いなと思いつつも、校長の話や、来賓の話を聞いていた。

そして、ある項目に差し掛かつたところで、周りの生徒たちがざわめき始めた。入学生の女の子達から黄色い悲鳴が上がった。

『きや――――つ――!』

『今野や――――んつ！』『生徒会長――――つ――!』『素敵――

一つ！』その声に司会者が動搖し始め、肝心の生徒会長はとうとう、檀上から女生徒達に手を振っていた。

その行動に会場内は、ますます騒がしくなって行つた。

そしてその騒ぎも、会長が話を始めると、ピタッと止まった。

私がなんの騒ぎだつたのだろうと呆然としている中、いつの間にか式が終了していた。式が終了すると、先程の騒ぎの余韻残したまま、女の子達がぞろぞろと校内の方へと歩き出した。

入学式を終えたとはいえ、まだ春休みの校内を歩き回つても良いのだろうか。

「ええ、構いませんよ。春休みでも部活動の方は行っていますからね。どうぞ、見学していって下さい」

近くにいた職員の人には話を聞き、私は校内を探検することに決めた。

まずは校庭に出て野球部と陸上部を発見した。

勉学に力を入れている学校なので、スポーツはそこそこかと思つていたらそこら辺の学校よりもレベルは遥かに上だった。

まずは陸上部をと思い、邪魔にならない所で見学していると、女の人人が声をかけてきた。

「ねえ、あなた新入生？陸上に興味あるの？良かつたらりちょっと走つてみない？」

私は遠慮したかつたけど、その人が強引に人の集まっているところまで引っ張つていってしまった。

「みんな～、新入生だつて」

女の人が部員に声をかけると、興味を持った生徒達がぞろぞろと私達の周りに集まつて来た。

「へえ、この子走れるの？」

「結構ちっちやいし、無茶なんじやない？」

「まあまあ、ちょっとだけでも走つてもらおうよ」

「うん、いいんじやない？ ものは試しにわ」

私のいない所で、どんどん話が進められている。

「決まり！ ねえ、あなたお名前は？」

いきなり呼ばれて私は咄嗟に声のした方へ振り向いた。

「えつと、楠木眞琴です」 「じゃあ、眞琴ちゃん、ちょっと走つてみてくれないかな？！」

いきなり先輩にそう言われ戸惑つていると、先輩が強引に50Mのスタートラインまで私を引っ張つて行つた。

「50Mでいいからさ。ね？」

有無を言わさぬ言葉に、私は渋々従つしかなかつた。

『う、～何でこんな事になつたんだろう。ただ見てただけなのになあ～』

心の中では嘆いてもしようがない。

もうスタートライン着いちゃつたわけだし。
やるしかないよね！

「じゃあ、行くよ～…位置に付いて、よーい…スタート～！」

私はその掛け声と共にスタートラインを蹴つて、全速力で走り抜いた。

ゴールして先輩たちの方を振り向くと、みんな呆然としながら私を見ている。何かマズイ事したかなと思い、謝るうと声を出

そうとした時、1人の先輩が私に駆け寄つて來た。

「眞琴ちゃん、凄い！タイム、7・35だよ！」

その先輩に続いて他の先輩もぞろぞろ集まつて來た。

「本当、すげえじやん！中学ん時陸上部だつた？」

「…いいえ。走るのは好きでしたけど、陸上部は入つてませんでし
た」

「じゃあ、何部に入つてたの？」

「…えつと、弓道部です」

「今回も弓道部に入つたと思つてるの？」

「…いいえ、今回は……」私がそう答えた途端、先輩達が目を輝か
せながら私に詰め寄つてきた。

「じゃあ、陸上部に入つ！！」

「そうだよ、そんなに早いんだしや。一緒に全国目指さうよー。」

「…あ、いえ…今日は、合氣道部に入つたと思つてるんです。…す
みません」

私がそう言つた途端、女の先輩達全員の目が冷たくなつた。

「ふんっ！あんたも長戸さん田当てつてわけだ」

「多いのよねえ、合氣道が好きでもないのに長戸君に近づきたいか
らつて、合氣道部に入る人」

「そうそう、そういうのムカツク！…」

「言つとくけどね、長戸さんもそういう子好きじゃないから、門前
払いされるのがオチだよ」

私は先輩達の言つてることが全然分からなかつた。

「…あのお、長戸さんて…誰ですか？」

先輩達は私の言葉に、目を大きく見開いて見つめてくる。

また、何かマズイ事言つちゃつたかな…？

すると、1人の先輩が信じられないと、私に詰め寄つて來た。

「…あなた、長戸副会長知らないの？今日の入学式にもいたじやな
い」

私はそんな先輩にたじろぎながら、すまなそうに答えた。

「…すみません。式の最中は他の女の子達の騒ぎに田代がいつちゃつて、あんまりよく見てませんでした。それに、私は人の名前を覚えるのが下手で……」

今度は、男の先輩もジロジロ見始めた。

「じゃあ、あなたはこの学校には今野会長や、長門副会長達が田当てで入って来たんじゃないの？」

「…？…いえ、この学校の近くの病院に母が入院しているもので、田当てといつたらそれですね。私の実家からだと通うのに不便で。父に相談してこの学校に入れてもらうと、近くのマンションに1人暮らしさせてもらえるようにしてもらつたんです」

私の話を聞くと、さつきまで険しい顔をしていた先輩達が、次々に私から目を逸らし始めた。

「…そうとは知らず、ごめんな。…いつも悪気があつたわけじゃないんだ。ただ、今野や長門がこの学校に入学してから、毎年入学していく奴はそいつらのファンだつたりしてさ。いい加減俺達もうんざりしてたんだ。俺達はこの学校が気について、この学校に入学したのに、そんなおふざけみたいな連中に入つてこられたんじや、俺達が真剣に勉強や部活やつてるのが馬鹿みたいだろ？！」　私、先輩の気持ち分かるな。

だつて私も先輩と同じ立場だつたら、絶対に許せないもん。

「…ごめんなさい、眞琴ちゃん。私てつきりあなたも生徒会田当てで入つて来たのかと思って、あんなヒドイ事言つて。…本当にごめんなさい…」

「…私も。生徒会の入つてる部活に入れないつてわかると、親愛隊みたいな作つちゃつて。おっかけして。私、そういうのが許せなくて。あなたもそいつらと同じだと思い込んじやつて、あんな事言つて、ごめんなさい」

「…」「めんね、眞琴ちゃん」

「…」「めんなさい。許して」

先輩達が次々と頭を下げる。

私は慌てて、先輩達に顔を上げるように言つた。

「謝らないで下さい。私、全然気にしてませんから。…それに、先輩達の気持ち良くわかります。私もそういうの嫌いですか？」

私の言葉にホッとしたのか、先輩達の顔に笑顔が戻つて来た。

「…良かった。あなたみたいな人が入学してくれて。陸上部に誘うのは、残念だけど諦めるわ」

「でも、いつでも遊びに来てね。眞琴ちゃんだったら、いつでも歓迎しちゃうから！」

先輩達のその言葉に私は嬉しくなった。

入学して初めての友達って思つていいよね！？

「あ、そういうえば。合氣道部に入りたかったんだよね？！残念だけど、今日は合氣道部はお休みだよ。登校初日から始まるから、またその日に行つてみなよ」

「はい。分かりました。…それじゃあ、私はこれで。先輩方、部活頑張つて下さいね」

私はそう言つと、陸上部を後にした。他の部活も色々と見学しようとしたが、そろそろお母さんのお見舞いに行きたいと思い、そのまま病院に向かつた。

病室につくと、ちょうど診察中だったらしくて、先生とばつたり会つた。

私は先生と田が合ひつと、ぺこりとお辞儀をした。「やあ、眞琴ちゃん。ここにちは。今日は制服だね。学校だつたのかな？」

先生は聴診機をしまいながら、私に話しかけてくれた。

「橋先生。母がいつもお世話になつています。今日は、学校の入学式だつたんですね」

「そうだつたんだ。その制服、よく似合つてるよ

先生はそろいいながら、私にウインクしてきた。

私はそんな先生にニッコリと笑いながら言葉を返した。

「ありがとうございます！先生にそう言ってもらえて嬉しいです

私の返答に、先生は苦笑いを漏らした。

「…うん、僕のウインクが通じないなんて…」「

「え？先生、何か言いましたか？」

「あつ！いやいや何でもないんだよ。…じゃあ、『ゆつくり。…つと、楠木さん。大好きな娘さんが来たからって、くれぐれもはしあき過ぎないように…いいですね。眞琴ちゃんもだよ！』

『は～い』

先生の厳しい注意に私とお母さんは、声を揃えて返事をした。

その後には病室内が笑いの渦に巻き込まれた。

「じゃあ、お大事に」

そう言ひと、先生と看護士さんは病室を出て行つた。

「眞琴。学校はどうだつた？部活何に入るか決めたの？好きな人出来たの？何か困つた事はない？え～っと、それから…」

「お母さん、落ち着いて。そんなに一遍に質問されたんじゃわからなくなつちゃうよ」

私が制止をかけると、お母さんは苦笑いを漏らした。

「『めんね。つい…。眞琴に色々聞きたくて。会うの久しぶりじゃない！？』

「こつちに引つ越して來たんだし、これからは毎日会いに來るから」「ねえ、眞琴。無理してない？わざわざこつちの学校に通うなんて。地元の高校に行きたかったんじゃないの？お母さんの事なら気にしなくていいのよ。前みたいに休みの日に会いに來てくれるだけで十分だから」

「病人がそんなことまで氣を回さなくともいいの！お母さんは、病氣を治すことだけ考えてなさい！それに、私今日行った学校ちょっと氣に入つてるんだから。今日、先輩達とお友達になつたのよ。陸上部の先輩達なんだけど、凄くいい人ばかりなんだから」

お母さんは私の言葉にホッとしたように溜息を吐いた。

「そつか。良かつたわ。でも、お母さんいつこの心臓が止まつちゃうかわからないから…今のうちに聞き逃したことがないように思つて」

お母さんのその言葉に、私はムッとした。

「お母さん!『病気は治ると信じなさい。そうすれば、必ず奇跡が起る』から」　途中からお母さんの声とハモつた。

お母さんを見ると、私の顔を見ながら苦笑いを漏らしていた。「そりだつたわね。病気は気からつて言つしね。『めんね、眞琴』

お母さんの顔に笑顔が戻った。

やっぱり人は笑つるのが一番だよね。

そして、私とお母さんは、学校の話や、私生活の話を面会時間ぎりぎりまで話していた。

『まもなく、面会時間の終了となります』

「あつ、もうこんな時間なんだ。時間が流れるのは早いね。じゃあ、私そろそろ帰るね。春休み中は身の回りの整頓しちゃいたいから暫く来れないかもしね。学校が始まつたら絶対に来るから」「あんまり無理しないのよ。学生は学生らしく勉強や部活動に励みなさい」

「大丈夫だよ。そつちも怠る気ないから。…じゃあ、またね」

私はそつ言つと、病室を出た。

そのままロビーに回ると、ちよづき帰りの仕度をした橋先生と会つた。

「やあ、眞琴ちゃん。今帰りかな?良かつたら送つていいくよ。夜道の一人歩きは危険だしね」

「え? いいんですか?」

私がそう言つと、先生はニッコリと笑つて頷いた。

「もちろん!じゃあ、行こうか」

先生はそう言つと、私の手を握り歩き出した。

先生の手がとても温かくて、私はゆっくりと握り返した。その行動にビックリしたのか、驚いた顔で私を見てきた。

「…天然……だよね?！」

「はい? 何ですか?」

「いやいや、何でもないよ。さあ、早く行こつか」

先生はそう言つと、私の手を引いて歩き出した。

駐車場に行く途中に、先生はお母さんのことを話してくれた。

「お母さん、随分と良くなつてきたよ。最近じゃ咳もあまり目立たなくなつてきたり。やっぱり眞琴ちゃんのおかげかな！？」

「いえ、そんな事ないです。先生が一生懸命してくれたおかげです。本当にありがとうございました！」

そう話している内に、駐車場に着いた。

先生は私の手を握りながら、助手席へエスコートしてくれた。

「あっ、ありがとうございます！」

「いいえ、どう致しまして。… ああ、出発致しますよ、お姫様」

先生はそう言つと、車を発進させた。

「わつきの続きなんだけどね。最近のお母さん随分と明るくなつたでしょ？これはお母さんに口止めされたことなんだけどね。お母さん、眞琴ちゃんがこっちに引っ越してきて凄く喜んでたよ。これから毎日のように娘が会いに来てくれるのよつて、来るナース1人1人に自慢してたんだから」

先生の言葉が凄く嬉しかった。

わつきお母さんは、私に無理しなくていいと言つていたから、もしかしたら私が來るのが嫌なんじゃないかと心配していたが、先生の言葉を聞いて、私の思い過ごしで良かつたと思った。

「… そうですか。お母さんにそう思つてもらつて良かつたです」

そして、私と先生がお母さんの話で盛り上がりつていると、車は

私の住んでいるマンションに到着してしまった。

「… 送つて下さつて、どうもありがとうございました！」

「どう致しました。じゃあ、お休み」

「お休みなさい」

私は先生に挨拶すると、マンションの中に入つて行つた。

今日は色々あつたけど、楽しい一日だつたなあ。

お母さんも元気そだつたし。

明日からは一人暮しだから、色々と忙しくなりそう。

でも、頑張らなきゃ…！

第1話～『入学』（後書き）

第1話終了いたしました！本当はプロローグとしてもう少し短くまとめたかったのですが、思いの外まとまりが悪くて…（私のまとめ方が悪いんですけどね…）そんなわけで、第1話目として書かせていただきました！急いで書いたものなので、誤字脱字あるかも知れません！もし、見つけましたらご指摘のほどよろしくお願いします！それでは、ここまで読んで下さった読者の皆様、どうもありがとうございました！また次回、お会いいたしましょう！

第2話・『初登校』（前書き）

いよいよ初登校日。眞琴の高校生活の始まりです。

第2話・『初登校』

入学式から数日経つた今日、待ちに待つた初登校日。

所々にいる人を横目に、ドキドキしながら1・Bのプレートが下がつている教室の戸を開けた。

-あれ？

教室に来るまでに結構な人とすれ違つたので、もう教室には人がたくさんごつた返しているのかと思ったら、男の子が数人いるだけで、女の子は1人も見当たらなかつた。

女の子はまだ誰も来てないのかな?と考えつつ、自分の出席番号の席を探し座つた。

人見知り気のある私は、女の子がない事もあり、1人で大人しく席に座つていた。

席に座りぼーっとしていると、突然上から声が降つてきた。

「おはよう！君は生徒会見に行かないの？」

ふつと顔を上げると、そこにはニツコリと笑つた可愛いという形容詞の似合う男の子が私を見下ろしていた。

私は緊張した面持ちでその男の子に挨拶する。

「あ、おはよう…」

私がそう答えると、彼は満面の笑みを浮かべまた話し掛けた。

「ねえ、君は生徒会の人達見に行かないの？」

「…うん、私はあまり興味ないし…。それに、私が行つてもみんなさんのご迷惑になるだけだろうし、人と話すのもあまり得意な方じやないから…」

私が俯きながら話すと、彼は私の机の前に座り目線を合わせてくれた。

「ふーん、結構変わつてるね。この学校に入つて生徒会の人達に興味ないなんて君ぐらいだよ。…あ、自己紹介まだだつたよね？！俺

は、須川尚人。尚人って呼んでね」

私も慌てて尚人君に視線を向けると、自己紹介をした。

「あつ、私は楠木眞琴。眞琴って呼んで。よろしくね。ねえ尚人君、みんな生徒会の人達を見に行ってるって言つてたけど、朝に何があるの？」

質問があまりにも意外だったのか、目を見開いて聞いてくる。

「…知らないの？眞琴は生徒会の誰かの追っ掛けでこの学校に入学したんじゃないの？」

この学校の生徒会が人気なのは入学式の時、先輩達から聞いたので知つていたが、“追っ掛け”という言葉が出る程とは予想外だ。

違うと首を振りながら言葉を続けた。

「…私がこの学校に入学したのは、母親のいる病院に通う為なの」

私はなるべくシリアルにならないように明るく話したつもりだつたが、尚人君は頭を垂れて落ち込んでいる。

「…ごめん。そんな理由があつたなんて知らなくて…。俺眞琴は生徒会の誰かの追っ掛けで入つて来たんだと思い込んでた。本当にごめん」 そんな責めるつもりで言つたわけじゃないのに、頭を下げて謝つてくる尚人君に向かつて、慌てて頭を上げるように言った。「ち、違うの。私が好きで行つてるだけで…。だから、尚人君を責めるつもりじゃ…。えっと…その…」

どんな言葉を出したら良いのか困つてしまつ。

とにかく謝らないでほしいと、一生懸命言葉を繋いだ。

「そ、そうだ！お母さんがね、私が来るの凄く楽しみにしてくれてる。それが凄く嬉しくて、だからこれからは毎日行けるようになって近くのこの学校を受験したの。マンションも借りて一人暮らししてるんだよ！それに、私はこの学校が気に入つてるので。だから…そんな顔しないで…」

私がそう言つと、尚人君は不思議そうに私の顔をじーっと見たあと、ふつと破顔した。

「ドキッ！」

その顔があまりにも可愛くて、私は不謹慎に「ドキドキしてしまった。

「そつか、良かつたよ。眞琴って結構可愛いんだな。そういう一生懸命なところ、俺好きだぞ！」

「ドキッ！？」

好きななんて言葉をストレートに言われた事がないので、ドキッとしてしまう。今まで付き合ってきた人はみんなあまりそういう事を言ってくれなかつた。

私はそれが当たり前なんだと思っていた。

でも、いつもやつてストレートに褒めてもらうのも悪くないと思つた。

「あ、ありがとう…」

照れながらもお礼を言つと、尚人君はまた二コッともう笑い掛けてくれた。

そんな尚人君に私も笑い掛けた時、廊下が騒がしくなり教室に女の子達が入つてきた。

その後ろからこのクラスの担任と思われる女の先生が一緒に入つてきた。

「みんな、早く席に着きなさい。HR始めるわよ！」

先生の号令と共に、さつきまで騒いでいた女の子達も大人しく席に着いた。

「じゃあ、まず私の自己紹介からね」

先生はそう言つと、教壇からクラス全員の顔を一瞥し喋り出した。

「私の名前は篠澤紗耶華です。担当教科は世界史。趣味はガーデニング。

特技はテニス。もちろん部活はテニス部の顧問よ。年齢は秘密だけど、こう見えて一児の母です。私の紹介はこんなところかな!? ジヤあ次はみんなに自己紹介してもらおうかな?! 名前、趣味、特技、

中学の時の部活と高校で入るうと思つてゐる部活、最後に一言で閉めてもらいましょう。じゃあ出席番号順に！」

篠澤先生がそう言つと、出席番号1番の子が立ち上がり自己紹介を始めた。

そして、2番3番と自己紹介が終わり、徐々に自分の番が近づいてくるに連れて緊張が高まつてくる。

「いよいよ私の番だ。

小さく深呼吸をすると、ゆっくり立ち上がり教室中に響くべく低い声を張り上げた。

「出席番号1・2番、楠木眞琴です。趣味は、絵を描くことで、特技は…特にありません。中学の時の部活は弓道部で、高校では合氣道部に入りました」と思つています。」

そう言つて終わつた途端、教室中がざわめき出した。『…え？ 私何か変な事言つちゃつたかな？』

周りの反応に私がオタオタしていると、篠澤先生がコホンッと一つ咳ばらいをし、生徒達を黙らせた。

「…楠木さん、何か一言ありますか？」

篠澤先生の言葉に我に帰ると、ピシッと背筋を伸ばしみんなに向かつて頭を下げた。

「あつ、よ、よろしくお願ひします！…」

私はそう言つ終わると、気が抜けたみたいにペタツと椅子に座り込んだ。

そして、自己紹介が続く。

時々送られる、何だか分からぬ視線が妙に気になつて仕方ない。

でも、その視線もある時を境に綺麗になくなつていった。

次は尚人君の番だ。

尚人君は自分の番が来ると早々に立ち上がり、元気な声を張り上げた。「出席番号1・8番、須川尚人です。趣味は体を動かす事で、特技は剣道です。中学ん時の部活は剣道部で、高校でももちろん剣

道部に入ります。楽しい高校生活にしようと思つてゐるので、みんな仲良くしてね！！』

尚人君がそう言つてはにかむと、また教室が騒ぎ出した。

中には -

『可愛い～！～』

とか、

『このクラス、当たりだよ！～』

などが聞こえてくる。

尚人君はたまに見てくる女の子に向かつて手を振つている。もうクラスの子と仲良くなつて凄いなーつと思つた。

私は人見知り気があつて、こういう自分をアピールすることが苦手な私は、尚人君がすごく羨ましく思う。

自己紹介が終わつて氣付いたことなのだが、女の子のほとんどが高校の部活で、『生徒会親衛隊部』に入りたいと言つていた。

有名な部活なのかな？

あとで誰かに聞いてみよつと考えてゐると、ちゅうど篠澤先生の話が終わつた。

この後は各部活の見学会が行われる。

私はもちろん合氣道部に行こうと仕度をして教室を出た。

この時、クラスのほとんどの子から視線を送られていることにまだ気付かなかつた。

私は散歩をしながら合氣道部の道場を探した。辺りをキヨロキヨロ見渡していると、どこからか男の人の怒鳴り声が聞こえてきた。

『遊び半分で来たのなら帰れっ！～』

私は何事かと、声のする方へ向かつ。

するとそこには、建物の周りを取り囲む女の子の群れと、それを一瞥する男の人人がいた。

女の子達は、きやーーと言いながら散つて行つた。女の子達がいなくなつた所から、『合氣道部道場』という看板が見えた。

見つけた！…と思つて近づいていく。

すると女の子達を追い払つていた人が私に気付いて声を掛けってきた。

「なんだ！お前も部長田当てで来たのか？悪いがそういうやつはお断りしてるんだ。他に用がないなら帰つてくれ！！」

そのまま入つて行こうとするその人に慌てて近づくと声を張り上げた。

「あ、あのつ… 1 - B、楠木眞琴です！見学させて下さい…お願ひします！」

私はその人に向かつて勢いよく頭を下げた。

「…お前、何を見学しに来たんだ？」

頭上から1オクターブ下がつた声が降つてきた。

私はまた何かマズイ事を言つてしまつたのかと思った。

もしかしたら看板では『合氣道部道場』となつていたが、本当は他の部活が使つていたのかも…

私はまたやつちやつたと思い、謝つてその場を立ち去ろうとした。

「す、すみません！看板に合氣道部とあつたもので…。私の勘違いでした！失礼しました！」

私はそのまま踵を返して走り去ろうとした。

すると、今度は違う声が私を静止させた。

「待てっ！此処は合氣道部であつてるぞ」

その声に振り返ると、そこには額から汗を流してけむらを見ている、長身の格好いい男が立つていた。

「わあ～、格好いい～」 私は思わず声に出していた。

それが聞こえたのか、その人は苦笑いを浮かべる。私はさらに、隣にいるもう1人の男の人の言葉に驚いている。

「部長。どうしたんですか？」

「ぶ、部長～！！！」

「休憩だ。おい、そこのお前！」

突然呼ばれて、慌てて視線を向けて返事をする。

「は、はいっ！！」

私はこの距離だと会話に不便なので、小走りで近づいて行つた。その人を目の前にすると、かなりの身長差で私が必然的に顔を上げる形になる。

「見学しに来たんだろ？見ていかないのか？」

私はその言葉に目を輝かせ、その人に縋り付いた。

「け、見学してもいいんですか？！」

すると私と部長さんの会話を聞いていた男の人気が慌てたように声を張り上げた。

「ぶ、部長っ！！」この女もしかしたら親衛隊のやつかもしれないんですねよっ！」

「今日は見学だけだ。正式な入部はまだだろ？それに様子を見ていれば分かる。こいつが何を用意して此処に来たのかな…」

「で、でも…」

内容は分からぬが、何やら言い争つているみたい。

それにもう1人の男の人は、私を入れるのを渋つているみたいだ。

もしかしたら、本当は何か規則があつて私は入れないのだろうか？

だとしたら、私はすぐ迷惑をかけている事になる。

「あ、あの～、私入部できないならいいです。規則で決まっているんですよ？！他の部に行つてみますんで…。お邪魔しました」頭を下げそのまま帰ろうとした。

でも、また部長さんの制止の声が聞こえて振り返つた。

「待てっ！誰も入部出来ないとは言つてないぞ。とりあえず見て行け！ちょうど休憩が終わる頃だ」

部長さんはそう言つと私の手を引いて道場に入れてくれた。

「此処に座れ。…合気道は初めてか？」

私は言われた所にちょこんつと正座すると、部長さんも相向か

いに正座し質問する。

入部テストだろうか？

私は部長さんの質問に正直に答えた。

「はい。初めてです」

部長さんは私の答えに、 “ よし ” と頷くと次の質問を投げ掛けた。

「じゃあ、中学のときは何部に入つてたんだ？」

「弓道部です」

「合氣道部には何故入らうと思つたんだ？」

「護身術を学びたかつたんです。私、今一人暮しをしていて、両親が心配しているので…」

私がそう答えると、部長さんは “ ふむ ” と考え込んでしまった。
そして、数秒後ようやく部長さんの口が開かれた。

「…それは、部活でないと出来ない事か？合氣道は難しいぞ。護身術を専門に教えている所に行つた方がいいのではないか？」

私はその言葉に少し表情を曇らせた。

「…塾などに通える余裕が家はないので…。入部させてもらえないでしようか？お願いします！！」

私は部長さんに土下座する勢いで頭を下げた。

「…どうだ？これが親衛隊のやつらと同じ女に見えるか？」

突然、明らかに私に向けられた言葉ではない言葉が聞こえてきた。

私は何事かとゆっくり頭を上げると、そこには合氣道部の部員達が私と部長さんの周りを取り囲んでいた。

部長さんはそちらを向いてその中の1人の人に話し掛けていた。
その人はさつき表にいて女の子達を一掃してた人だ。その人は私をちらつと見ると、部長さんに答えた。

「…いえ。あいつらとは違うですね。この子なら私は歓迎します！」

その人の答えに部長さんは “ うん ” と頷いた。

「他はどうだ？」この二つの入部に反対のものはあるか？

部長さんの言葉に意見を上げる人は誰1人いなかつた。

「部長さんはそれを確認すると、じちりに向き直つて口を開いた。
「合格だ。入部の日待つてね。…本当は始めから合格にしてよいと思
つっていたのだがな、こいつがどうしてもテストをしたいこと言ひ出し
てな。急遽やらせてもらひことになつた。…すまんな、試す形にな
つて」

私は入部できる事になつて舞い上がつていた。

「そ、そんな。気にしないで下さい。私は入部させてもらえるだけ
で嬉しいんですから。よ、よろしくお願ひします！！」

卷一

そんな私に向かって、みなさんが拍手をくれた。

…リストも合格したりるので自己紹介でもしておこうか

「今更自己紹介もないでしょーう!?

だからな

いた。

まず、私が自己紹介しなきゃ！

「あ、あの！私は、1-B、櫻木眞琴です！改めてようこそお願いします！」

「俺は3・B、長戸皇だ。合氣道部の部長をしている。よろしく」
私はその手を取り、再び“よろしくお願ひします”と頭を下げ

た。

-あれ？長戸…？

どこかで聞いたことある名前に、私は頭を捻った。 -あつー！-

「長口って、あの生徒会副会長のつ？」

私の言葉に、私が驚いた以上に部長も含め、部員の人達が驚きで固まっていた。

「…知らなかつたのか？」

さつき部長と話していた人がボソリと呟いた。

私はその問いに声を出さず、ただ頷いた。

『ええええええつ！…』 次の瞬間、部室中が大騒ぎになつた。

『ありえない』とか、『これは現実じやない』とか、『この子はきっと遠い遠い宇宙から來たんだ』などなど……

失礼極まりない声が次々と發せられている。

その中で、部長だけが何故か嬉しそうな顔をしていた。

『まあ、いいじやないか。ところで、見学はどうするんだ？一応は6時までやつているが。見学会と言つてもこのまま解散になるからな。見ていくなら俺が基本を少しだけだが教えてやるぞ』

願つてもいゝない申し出だが、このあと病院に行ってお母さんいろいろ報告しないと……

勿体ないけど、せっかくの申し出を断ることとした。

「…教えて頂けるのはとても有り難い事なのですが、私これから用がありますので、失礼致します」

私がそう答えると、長戸さんが小声で“残念”と呟いた。

「じゃあ、教えるのは最初の部活日に取つておくよ。明日は振り替えで休みだから、明後日だね。場所は各教室に張り出されると思つから。それを頼りに来なさい」

「はい、分かりました。わざわざ丁寧にありがとうございます！…」私は長戸さんに向かつて頭を下げる、荷物を持ち道場をあとにした。

この時は道場の影から、入口に群がつた女の子達に睨まれている事にまだ気付かなかつた。

『病室』

「お兄ちゃんつ！…」

今日もお母さんに会って病室を開けてみると、セレハは珍しい先客がいた。

「よお、久しぶり。元気にしてたか？」

お兄ちゃんは椅子に座りながら私に声を掛けてくれる。

私は久々の家族に嬉しくなつて小走りで近づいて行つた。「久しぶりつて、まだ1週間も経つてないよ。お兄ちゃんこそ元気にしてたの？」

「もちろん、元気にしてたわ。あ、そうだ。眞琴、今夜泊めてくれないか？明日1つ前に用があるんだけど、ホテル代高くてさ。頼むよ」

お兄ちゃんは顔の前に手を合わせ、頭を下げる。

私の返事はもちひん……

「いいよ。見返りはあとで考えておくから……」

満面の笑顔で答えると、お兄ちゃんは苦笑いを漏らして呟いた。

「…しつかり育つてくれて、お兄ちゃんは嬉しいよ（泣）」

その様子を見ていたお母さんは、吹き出すように笑い出した。お兄ちゃんも混ざつて会話はいつも以上に盛り上がった。

『まもなく面会時間の終了となります』

その放送に反応するように、お兄ちゃんは椅子から立ち上がりた。「もうこんな時間か…。結構早めに来たんだけどな。眞琴、そろそろ帰るか！？」

お兄ちゃんはそつぱつと、帰りの仕度を始めた。

「うんーお母さん、また来るね。ちやんと暖かくして寝るんだよ」

私の言葉にお母さんは、笑顔で“はいはい”と答えてくれた。

「せひ、行くぞ。じゃあな母さん、また来るかい」

お兄ちゃんの言葉には、『仮をつけて』と答えた。

くまで私とお兄ちゃんは、お互にが会つていらない間の出来事を飽きた事なく話していた。

家に着いた私とお兄ちゃんは、お兄ちゃんが作ってくれた晩ご飯を食べて眠りについた。

私はこの時、この後に起きた驚きの事実を知る由もなく、幸せな夢を見ていた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4944b/>

恋愛traveling

2010年12月18日15時09分発行